

野幌森林公園では再生活動地や天然更新地も順調に回復 (平成23年度野幌自然環境モニタリング調査結果概要)

北海道森林管理局では平成16年9月に発生した風倒被害を受け、「100年前の原始性が感じられる自然林を目指した森林づくり」を目標に再生活動を実施している野幌森林公園の自然環境を把握するため、平成18年度から、森林植生、歩行性甲虫相、菌類相、及び野生動物の4項目について調査を実施している。

1 調査箇所(森林植生、歩行性甲虫相、菌類相)

- ① 平成16年秋の台風による風倒後、主として重機を用いた地拵を行った後、植樹などの森林再生活動が行われている箇所(「再生活動地」という)
- ② 風倒木を搬出後、植栽なしの箇所(「半処理区」という)
- ③ 風倒後、試験的にそのまま保存した箇所(「非処理区」という)
- ④ 野幌を代表する林相を有し、風倒被害をあまり受けずに現存する「百年前の原始性」が感じられる森林(「良好な自然林」という)

2 森林植生

トドマツ再生林については、30m×30m、ハンノキヤチダモ林は10m×10mのプロットを設置し、プロット内の樹木の樹高・直径、植物の被覆度等を測定。他の調査箇所については、5m×5mのプロットを3～5ずつ設定し、出現する植物を記録。

(1) 良好な自然林

① トドマツ再生林

上層木の半数をトドマツが占める。(最大樹高はハルニレ27m、最大胸高直径はトドマツ48cm) 林床は、クマイザサが98%を占めている。

② ハンノキ・ヤチダモ林

ハンノキ・ヤチダモを主としてエゾイタヤ・キタコブシなど若干混生する。(最大樹高はヤチダモ27m、最大胸高直径はハンノキ80cm)。林床はミズバショウ25%、ヤマドリゼンマイ7%、シラネワラブイ5%、ハイヌガヤ5%ほかが被覆している。



トドマツ再生林

(2) 非処理区

陽光がよく入るところでは初期成長の良いホウノキ、キタコブシ、ナナカマド、ミズキ、ウダイカンバ、タラノキが4mを超えているが、樹高1m未満の個体数はかなり少なかった。

下層植生ではチシマザサの繁茂が顕著である。

(3) 半処理区

タラノキが多いが、樹高4m以上に達している他の樹種も出現している。

下層植生ではチシマザサ、クマイザサなどササ類の繁茂が顕著である。



ハンノキ・ヤチダモ林

(4) 再生活動地

植栽木はほぼ全域で順調な成長がみられ、ヤチダモは樹高4m、胸高直径3.8cmに達している個体が見られた。

天然更新した高木性樹種も順調に成長しており、樹高1m以上の天然更新木が半分強を占める箇所もあった。

3 歩行性甲虫相

ピットフォールトラップにより歩行性甲虫を捕獲する調査を実施。

(1) 平成23年度の総捕獲種数は、50種(平成22年度は60種)で捕獲数は10,766頭

捕獲頭数は平成19年をピークに減少傾向が続けており、平成23年度においても前年度と同じような状況が続いており、森林性種の捕獲割合が徐々に高くなってきている傾向は維持されていると考えられる。

(2) 解放性種は依然ギャップに残っており、対照区としている自然林の割合に到達していないものの、森林回復の「第2段階」にあると考えられる。

4 菌類相

一調査箇所あたり50×5mの帯状区を2本設定し、木材腐朽菌の子実体を調査。

種名	再生活動地	天然林区	人工林区
ウスバシハイタケ	ピーク(H20)	高	
スエヒロタケ・トマツガンシユビョウキン・アラケカワラタケ	減少傾向	低	
カワラタケ・レンガタケ・キカイガラタケ	ピーク(H19~H22)	低	
モミサルノシカケ	なし	低	6カ年通じて出現
サカツキカワラタケ	低	6カ年通じて出現	低

再生活動地では、着実に枯死木の腐朽が進んでいるが、依然として切り株や枯れた木に生息する種が多く、森林回復の段階は昨年同様「第1段階」。

5 野生動物相

自動撮影装置を12箇所に設置し、夏と秋の2回夜間撮影を実施。

(1) 撮影頻度が高かったのはキツネであったが、アライグマも多く撮影された。

(2) 特定外来種のアライグマは10箇所で撮影され、森林再生への影響が懸念されるエゾシカは4箇所で撮影された。

アライグマについては生息数の増加が懸念される。一方、エゾシカの撮影頻度は若干の増加傾向は見られるが、現段階では影響は少ないものと考えられる。



エゾシカ



アライグマ

問い合わせ先：北海道森林管理局 石狩地域森林環境保全ふれあいセンター

〒064-0809 札幌市中央区南9条西23丁目1-10

TEL 011-533-6741 E-mail: h_ishikari_f@rinya.maff.go.jp